

第31回

# 私の古典学習法

本誌審査委員 見城 正訓 〈前編〉

書家としての礎は『九成宮醴泉銘』にあり



見城 正訓 (けんじょう・まさのり)



昭和55年 静岡県静岡市生まれ  
師 平形精逸先生(本誌編集顧問・日展会員)

〈略歴〉

平成14年 静岡大学教育学部芸術文化課程  
書文化専攻卒業  
平成16年 静岡大学大学院(国文学専修)  
修了  
平成19年 静岡大学教育学部非常勤講師  
平成29年 月刊「書写書道」毛筆手本執筆  
平成30年 東京書籍(株)小・中学校書写  
編集委員

〈現在〉

静岡大学人文社会科学部非常勤講師、全国  
大学書道学会理事、読売書法会理事、謙慎  
書道会常任理事、SBS学苑パルシェ校講  
師 他

師・平形精逸先生（本誌編集顧問）の影響だけでなく、私にとって常に節目には、『九成宮醴泉銘』があった。現在でも、私の書の基盤ともいえる「構築力」を養うものとして、この古典を座右に置いている。臨書すればするほど形の美しさに魅了されながらも、一方では自分の非力さを痛感するばかりである。

## Ⅰ 古典との出会い

高校三年の時、偶然にも静岡大学で書を専門に学べる学科があることを知り、「大学で書道ができるなんて面白そうだな」と興味があったため志望することにした。ただし、実技的にどのくらいのレベルを要求されるかが全く分からなかったため、夏に開催されたオーブンキャンパスに参加し、実技について質問したところ、国語科の教授から「書道室は夏休みでも学生の出入りがあると思うから訪ねてみるというよ」との助言をもらい、早速訪ねてみることにした。そこで出会った先輩が本誌でも執筆されている滝口雅弘先生だった。滝口先生は見ず知らずの私に対し、丁寧で真摯な対応をしてくれ、「古典では『九成宮（醴泉銘）』をやるといいよ」と具体的なアドバイスを授かった。必死でメモを取ったものの、それまで古典について全くの無知だった私は、『九成宮』？何それ？と正直戸惑った。早速書店に行って目当てのものを探して

みると、確かに『九成宮』は存在した。すぐに購入し、実技試験に向けて自己流で練習したのが初の臨書体験だった。

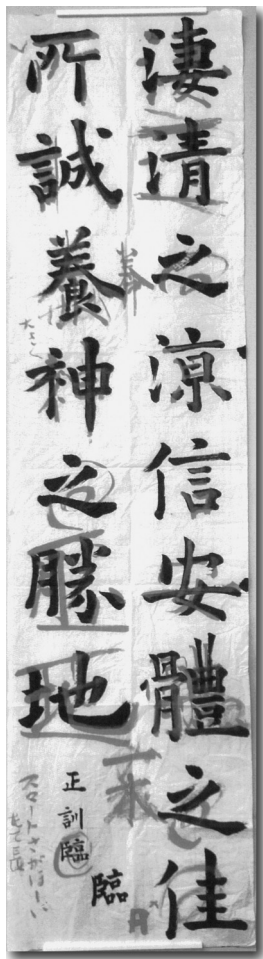
## Ⅱ 大学初めての授業も『九成宮醴泉銘』

何とか大学に進学できたものの、古典学習については全てが自己流だったため、どのように古典学習をしたらよいかかわからないまま、大学の初講義を受けることになった。

静岡大学教育学部芸術文化課程書文化専攻は、総合芸術課程芸術コース美術・書道専修から名称が変更され、私の代が一期生だった。岐阜県出身者が四名、福井県出身者が一名、

地元静岡県出身者は私だけで、今思えばやはり皆経験者ばかりの非常にレベルの高い学年だった。

講義では、まず平形先生が鑑賞学習として『九成宮醴泉銘』がどのような古典であり、どのような特徴を持っているかを解説してくださった。その後、何枚か目の前で臨書本を書かれた。それまで、漠然と「似せて書く」ことしか頭になかった私にとって、用筆の角度や結構の取り方、紙面への収め方など、かなり分析的に細かく指導されたことに衝撃を受けたのを今でも鮮明に覚えている。



図版2 初の半切臨書作品。外形が横広で重心が低い文字が散見され、線もあまい。とても拙く恥ずかしい限りだが、この時はこれが精一杯だった。当時大学院生だった滝口先輩に朱の添削とアドバイスをもらった



図版1 初授業時の課題（集字）。今回、25年ぶりに書いてみた作。字形のポイントは、平形先生が授業時に指導してくれたもの